

ボートとまちづくり

ボートとの出会い

ボートに初めて触れたのは小学校二年生のころだった。足立区にあった家の近くを流れる荒川が洪水になり、河川敷が一面海ようになった。早速、近所の遊び仲間と探検隊を組織し、ひざ丈の水をかきわけて歩き回った。送電線の鉄塔の近くに見たことのない船が流れついていた。四つある座席に車輪が付いていて、前後に動くようになっている。船の側面には鉄パイプを三角形に組んだものが四個ついている。今から考えると漕艇競技に使う「ナックルフォア」だった。上流の戸田あたりから流されてきたらしい。

小学校三年生のとき、浦和に引っ越した。学校が終わると見沼たんぼまで自転車で遊びに行ったりした。ベニヤ板を使ってボートを自作して池に浮かべてみたいと思った。設計図を作ってみたが、泳ぎに自信がないことを思い出しあきらめた。

浦和高校に入ったら家の近所の先輩がボート部だった。それまでスポーツにとんと縁がなかったので他のスポーツでは追いつけそうもないし、体を鍛えるには最適に思えた。部室に行ってみたら新入生は五人なので自動的にレギュラーになれそうだ。高校からボートコースのある戸田までは約十km、一時間ほどかかる。平日は陸上トレーニングのみで、もっぱら土日に漕ぐしかない。毎週土日の戸田ボートコース通いが始まった。

ボートに乗り込み初めて水の上に浮かんだときは、思わずにっこりしてしまった。春風の中、緑あふれるボートコースを船は滑らかに進む。素人が漕いでいるのに滑らかに進むのは、四人の漕手のうち二人は漕がずにオールを水面にあてて船が揺れるのを抑えているためだ。この抑え役になったときに、流れる水に手を入れてみる。春の水はまだ冷たい。四人で漕ぐと最初はバラバラなので船が激しく揺れる。四mもあるオールは重いし、うまく操れないから、他の漕手と動きがずれる。まだ自分のオールは水の中にあるのに前で漕いでいる二年生は漕ぎおわって体が後方へ動いてくる。自分のオールの先端に二年生の尻が激突する。「バカヤロー、ちゃんと漕げ」と叱咤され、必死でがんばるがなかなか上達しない。練習が終わると二年生が尻のアザを見せてくれた。

建設省大臣官房 政策企画官 宇塚 公一 ボートの楽しみ

楽しいのは、やはり荒川に漕ぎ出すときだ。船は百kg以上あるので堤防を越えて川まで運搬するのは大変だが、川での練習は景色が変化していくのでうれしい。ボートコースでは自転車で追いかけてきてハードな練習メニューを指示するコーチも川にはいない。ときには、赤羽あたりで上陸してアイスクリームを食べたり。荒川を溯ると秋ヶ瀬堰まで行ける。両岸がゴルフ場になっているが水面が低いのでゴルファーは見えない。ゴルファーからもボートは見えないので、たまに頭上をボールが飛びこす。

新人のうちはノンビリ練習していても許されたが、試合を目指す頃になるときつくなった。ボートという奴隷船のイメージがあるせいか、渾身の力を込めてじわーっと漕ぐように見える。しかし、走っているボートから見ると水面は毎秒四mの速さで「流れて」いるわけで、「じわーっ」ではなく「さっさっ」と漕がなければならない。毎秒四mという速度はかなりのもので、うっかりオールを水から抜くのにしくじるとオールに体が押されて水の中に叩き込まれる位である。毎秒四mで漕いでいる分には力が要らないが、そうするとオールのまわりが波立たないので手抜きがコックスや他の漕手からは一目瞭然である。結果的に、毎秒四m以上でさっさと漕ぐべく、動くベルトの上でのランニングのように、必死で漕がざるを得ないことになる。

その頃になると、川での練習はつらい。川には距離標識がないものだから、橋から橋までといった長距離になるか、あるいは百本漕ぐといった数量になる。コックスが数えるのだが、必ず途中で何本漕いだかを忘れる。船の上ではコックスの命令は絶対で、疲れたから一人だけ休むというわけにはいかない。「いつまで漕がせるんだー」という罵声が飛ぶ。

そんなとき、突然、ボートが静寂に包まれることがある。いつも聞こえる船の横揺れのきしみや波の音、オールが水にぶつかる音などが全く聞こえない。透明な膜で外界から隔絶された中を船は微動だにせず矢のように一直線に進む。四人の漕手の動きが完璧にバランスし、精密に連動している。普段はのろのろと水をかきまわす重いオールがまるで空気をかいているかのように軽い。頭が軽くしびれるような恍惚感を覚える。今までに数回しか経験したことのないボートマンの至福の一瞬だ。

ボートと仲間たち

受験勉強でなまった体で大学の門をくぐったら、ボート部の歓迎コンパにつかまった。また、戸田へ通う日々が始まった。と思ったら、その内、逆に戸田から大学に通うようになる。大学一年の夏は松戸遠漕へ。荒川をくだり、新川を通して、江戸川を溯り、松戸で一泊して、翌日逆コースで戻る。一年生数十名が七人乗りの船五隻に分乗して、途中の橋から橋までを競争しながら漕いでいく。青白かったガリ勉たちが、日焼けしてたくましくなる。二年生の春は東商戦（東大と一ツ橋大の定期戦）。初めての公式レースである。冬の朝五時から起きだして凍り付く風に耐えながら練習してきた成果を見せる場だ。二年生になった我々はエイト五艇に乗って相手の二年生二艇とジュニアレースを行い、圧勝した。二年生の夏は京大戦。一高・三高以来の伝統あるレースで、瀬田川と戸田で交互に開催される。初めて漕いだ瀬田川は流れが速く面食らった。練習中に瀬田の唐橋にオールをぶつけて折ったりしたが、試合は瀬田川での十年ぶりの勝利となった。

レースに出て、勝てば酔いつぶれて眠り、負ければ練習で手を抜いたことを悔やむ。ウェイトトレーニングのバーベルの重さを競い、体重を増やすために丼飯をお代わりする。早朝練習が終わって朝食を腹いっぱい食べた後はセンベイ布団の極楽が待っている。次第に大学への足が遠のく。留年への道をまっしぐらに進んだ。

幸いなことに、建設省へ就職できた。図らずも、河川を担当することになる。最初に現場の課長に出たのが、鶴見川や多摩川を担当する京浜工事事務所だった。昭和五十七年当時、鶴見川では川の浚渫の真っ最中だった。洪水が溢れずに流れるように、ヘドロがたまった川底を五mほど掘り下げる。干潮のときは干上がっていた川底が常時水面になった。悪臭がしていた水質もボラが住むほどに回復した。「これならボートが漕げる」と直感した。ボート界の大長老に考えを話したらこちらが恐縮するほどの運動をしていた。漕艇協会の幹部をモーターボートで視察に案内したり、ボート部のOBだった細郷横浜市長への艇庫建設の陳情にお供したのが懐かしい。その後、海外に転勤した私は、建設に当たっての大変な苦労を後から知ったが、とにかく鶴見川でボートが漕げるようになった。当時御尽力頂いた大長老や漕艇協会幹部そして細郷市長も故人になられたが、鶴見川のボートコースは横浜市漕艇協会の活動によ

って十周年を迎える。

ボートの楽しみを一度知ってしまうと、水面を見るたび（あるいは、将来の水面を想像するたび）そこでボートを漕げないかと考える。その後、荒川下流工事事務所に頼んで戸田橋上流の階段護岸をボートが出しやすいように設計してもらったり、お礼の意味でボート部をつくる世話をしたりしていたが、宮ヶ瀬ダムの記事を書いていたときには将来の湖面利用にボートを取り入れるよう構想づくりをした。つづいて八ツ場ダムの所長になったときも思っただけで先輩の事務所長がボートコースの絵を書いてくれた。いささか職権乱用かとも思えるが、河川管理者も水面から堤防越しにまちを眺める視点を意識する必要がある。

新しい連携・交流ルーツ Eボート

最近、新しい楽しみに出会った。「Eボート」という、軽量の十人乗りボートである。安定性が良く、子供や女性が簡単に漕ぐことができる。今、全国の市町村がこのEボートを導入し、川やダム湖を利用して流域を連携するEボート大会を催すなどしてまちおこしに取り組んでいる（問い合わせ先、地域交流センター、TEL 03 (3581) 2700）。十月十一日には、それら各地の代表チームが多摩川に集結して全国大会を開いた。川がより一層市民にとって身近になっていく。



写真 - 1 Eボート全国大会、同時に乗馬体験も行われた。

Eボートのいくつかのタイプのうち、ファルト型は組み立て式である。高強度アルミ合金のパイプをブラモデルの要領で組み合わせるとフレームになる。フレームに丈夫な

カバーをかぶせるだけで全長八mの安定性の高い立派な船になる。一度やってみるととてもおもしろい作業なので、



写真 - 2 Eボートのフレーム



写真 - 3 ファルト型Eボートの組み立て

組み立て始めるところから大人も子供も手伝いたくなる。

水面に浮かべるのは簡単だ。なにしろ重量は六十五kgしかない。乗り込む十人で軽々と運べる。カヌーで使うパドルを一本ずつ持ち十人が力をあわせて漕ぎ出す。それぞれの力で漕げばよいので、子供も老人も男も女も同時に楽しめる。ただし、底が平らなので方向性が悪い。船をまっすぐ進めるためには十人が力を合わせなくてはならない。力任せに漕ぐ大人の船より動きのそった子供の船が早かったりする。

Eボートの使い方は様々だ。モーターを使わないから騒音や水質汚染がない。湖の自然観察に最適だし、グループで水上ピクニックにも行ける。災害時には、救助艇にもなる。しかし、船が二隻あれば人間誰でも競争したくなる。

ボートとむらおこし

それなら流域の人が集まってEボート大会をやろうじゃないか、ということで平成九年には北は北海道の石狩川から南は熊本の球磨川まで全国三十三個所でEボート大会が開かれた。いずれも地元市町村や住民団体が主催したものだ。川の上流や下流に住む住民が老いも若きも一個所に集結してEボートをルーツとして交流する。感動したのは球磨川の話だ。視覚障害を持つ人たちが参加した。周囲は心配したのだが、聴覚に優れる彼らたちはほかの漕ぎ手の音を聞き取り見事にチームワークを発揮して漕ぎ通したとのこと。Eボートの底が樹脂製なので素足で水の動きを感じ取れたのが良かったと言っていたという。平成九年十月十一日に多摩川で全国各地のチームが集まって開かれたEボート全国大会に行ってみた。



写真 - 4 Eボート全国大会の様子

見物にでかけた私も漕いでみたくなり、岩手県川崎村チームの岩淵正義さんに頼んで参加させてもらった。岩手県川崎村は全国でも最もEボートの盛んな市町村の一つで、地元の大には一世帯一人が選手として参加するそうである。元々洪水に苦しめられ川と戦ってきた村だが、それを逆手にとって今は「川の駅かわさき」をキャッチフレーズにまちづくりを進めている。岩淵さんは北上川流域Eボートスタッフ協議会の幹事長という役職にある。地元の大ではボランティアのスタッフを率いて総参加数百チームを超えるレースを取り仕切る。今年の優勝、準優勝は六十から七十歳代で固めたチームが、舟運で栄えた昔のキネツカで勝ち取ったとのこと。

多摩川の宿河原堰上流で行われた全国大会は川幅の制約

から百mほどの距離を往復するものだが、折り返しの技術が勝敗を左右する。横目で相手艇を見ながら、掛け声にあわせて一心不乱に漕ぎ続けるといやがおうにも一体感が生まれる。大会には北海道尻別川、北上川、鬼怒川、信濃川、神通川、淀川、筑後川、球磨川や地元荒川、多摩川などから各チームが参加した。優勝したのは「山口未来博チーム」、以下「川の駅かわさきAチーム」と続き、我が「川の駅かわさきBチーム」は残念ながら準決勝敗退であった。が、予選から敗者復活戦、準決勝と三レースを戦い抜き、レースが終わった後に漕いだ仲間と飲むビールは久しぶりの格別の味だった。

ボートとまちづくり

Eボートを利用した流域の連携交流はますます発展するだろう。ボートを媒介にした川・水辺とまちづくりの連携を進め「川の365日」を具体化するためには、それを可能にする基盤の整備が必要である。

日本の川は以下のように水遊びに利用しにくい、治水面の課題を考えた上で解決策もあると考える。

- ・洪水と渇水の水位の差が大きい

日本の気候が原因だが、堰を作れば水位は安定可能である。取水のためだけでなく景観・生態系・河床安定などを考慮して堰を作る事例もある。河口部では堰を作らなくとも十分な水深が確保できるが、干満がある。そのため浮き桟橋が作られるが、洪水時は撤去する必要があるため厳格な管理が求められる。水遊び用には管理が容易で船の出入れがしやすい緩傾斜の岸辺が望ましい。水辺にコケがついて滑りやすくなることも考慮しなくてはならない。

- ・普段から流速が速い

江戸時代に舟運に利用された川では蛇行をさせることによって流速を遅くした。蛇行を放置すれば氾濫しやすいが、土地利用にまだ余裕があったからできたのだ。今流速を遅くするには堰を作らざるを得ない。しかし、堰を作ることは洪水の危険性を増す。チームズ川で見かけた堰は簡単な構造で時には周辺の人家も浸水するという。それでも許容されているのは、地形上被害が川周辺に留まるからで、氾濫した水が広範囲に被害を与える日本の川とは根本的に異なる。取水のために必要な堰以外に堰を作るのは川の地形的条件を十分見極めて検討する必要がある。

- ・河川敷が広いと水面に行くのに遠い



写真 - 5

なぜ広い河川敷があるかということ、洪水を流すために必要な川幅を計算してその両側に堤防を作ったからだ。しかも、河川敷は洪水のとき削られることを想定しているから、堤防まで削られないように間に距離がなければならない。水遊びをするのにはあまり苦にならないが、旅客向けの舟運では致命的になる。旅客向けの船着き場は他の交通手段との結節点となるよう考慮する必要がある。例えば、支川が合流する前の便利な地点に船着き場を作るといったように。

- ・人口に比べて川が狭く利用密度が高くなる

現在は、川で遊ぶ人はまだ少ないが、今後Eボートのような軽便な利用手段が普及して潜在的利用者が利用するようになれば、特に大都市圏では圧倒的な密度になる。今でも戸田周辺の荒川では漕艇用ボートと舟運やレジャーボートが水面利用で競合している。日本の川の普段の水面は国土面積からみても実は小さいのだ。水面は人間の活動のためだけにあるのではない。自然生態系の保全も含めてルールづくりが必要だ。

水辺の再生へ

水辺は陸にいる人間と水面にいる人間との接点である。陸から水を眺める視点だけではなく、水面から陸を眺める視点があって美しいまちが生まれる。これからの水辺づくりに水面からの視点への配慮が含まれることを心から願う。